

レファレンス
余 話

ある日の午後のことである。

会議中で空席の部長の卓上電話がなった。

福岡文化会館美術部から、他所からの紹介でとのことで、『東福寺開山聖一國師年譜』の借用方を依頼してきたのだ。

『国書総目録』〔以下『国書』と省略〕第4巻（昭和41刊）によれば、応永二十四年の五山版が貴館にあるそうで、展覧会のためにお借りしたい、と言うのである。

五山版であれば、当然貴重書である筈、所蔵の確認が第一と貴重書室へとんで行った。ところが調査の結果、当館にはその版はないと言うのである。『国書』にはなんで五山版が国会図書館にあると記されたのであろうか？ 疑問に思った私は、長年『国書』の編集にあられた生字引の岩波書店のM氏に電話をしてみた。当館にあるというものを他所にきく一種の気はずかしさに、小さくなりながら。さすが『国書』の編集者である。一度電話を切ってから、立板に水の返事がかえてきた。

『帝国図書館 和漢図書 書名目録』第3編 972頁上段に、刊期の記載はないが、その書名の記載がある。函架番号は、821-168。『佛書解説大辞典』（大東出版社 昭9刊）第8巻211頁、「東福開山聖一國師年譜」の項には、応永二四刊（帝国、八二一・一六八）と記されている。現物調査は、これについては行わなかったが、同一と判定して、『国書』は、聖一國師年譜の項に、応永二十四版（五山版）国会……と記した。ただし、『禪籍目録』（駒込大学図書館編

昭和3刊）には、所蔵箇所として、国会の記載はなかったが。もし異なる資料ならば教えてほしいと結ばれた。

当館の八二一函は、元和六跋刊（1620年）、応永二十四年刊より、約200年あとのものである。現物の跋文によって、応永二十四年刊本を、守藤という小比丘が、読みやすいように、訓点を施して覆刻したものであることが、あとでわかった。

『新纂 禪籍目録』（昭和37刊）にも、元和六（跋）刊として、当館所蔵の記載があつて然るべきであった。

格式のある著名な本は、間違いが少ないという先入観から、孫引をして、現物の確認をちょっぴり省略し、思わぬ落とし穴に落ちこんだことを、私も『全集叢書細目総覧 古典編』の編集の際、何度も経験したことがあるので、書誌作成のきびしさを、また痛い程噛みしめた。

M氏は、「国書研究所」の解散のあとも、訂正やら、新しい掘り出しに今も余念がないので、プラスになることを願って伝えたことは勿論である。

ところで、貴重な古活字版が当館の書庫から発見されたのでは？ と期待に目を輝かしながら、八二一函本を再点検していた貴重書室の同僚に、私は言ったものである。「宝艦、ナヒーモフ号発見！ って言うようなわけには、なかなかいかないものねえ」（一般参考課・安永 道）